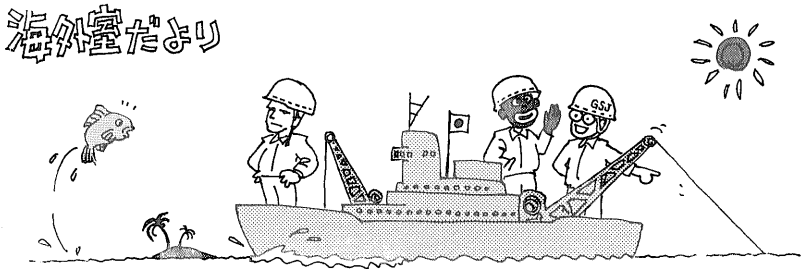


No.14

リフトバレーに下る　東アフリカの陸地を南北に走る大地溝帯グレート・リフトバレーは　地学に携わる者なら　誰でも一度は見たいと思う所のひとつである．　フォローアップ・チームのエチオピア滞在は6日に過ぎなかったが　間に日曜日が入ったため　バレーに下る機会に恵まれた．

南のモザンビークを発し　タンザニア　ケニアを北上してきたリフトバレーは　ここエチオピアでは　国土を2分する形で SW—NE 方向に走り　紅海沿岸のアファー低地に達している（図1参照）．

首都のアジスアベバは　国のほぼ中央　リフトバレーの直ぐ北側の熔岩台地に広がる．　海抜約2,500m の高地にあるため　熱帯圏に入る（9°N）ものの　暑さを知らない常春の土地である．　しかし　気圧が低過ぎるために　ここに住む外国人は時どき　低地（バレー）に下りて休養するという．

目的地のアルタ火山は　首都の南約150kmに位置しこの国が地熱開発に着手した最初のところである．　EEC の援助により8本の大型堀さくが行われた結果　5孔で蒸気を得　現在は地熱発電所建設の可能性（フィージビリティー）を調べている．

日帰りの旅の様子は　写真で追ってみることにする．

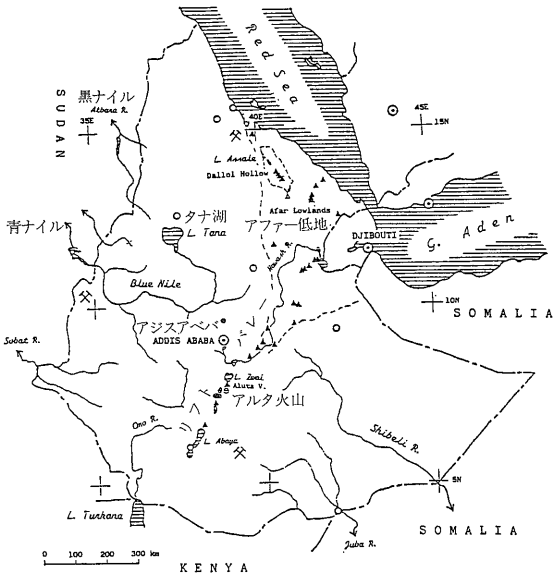


図 1

アルタ火山・地熱開発の蒸気井　写真 4→

アジスアベバ付近のリフトバレーには　数多くの（少くとも1ダース）新期（鮮新世以降）の火山が密集している（図1参照）．　アルタ火山もそのひとつで小規模のカルデラをもつ．　前記　8本の井戸はカルデラのリムやフロアーに掘られていた．　写真の井戸は火口原のもので　温度はやや低く　約200℃という．

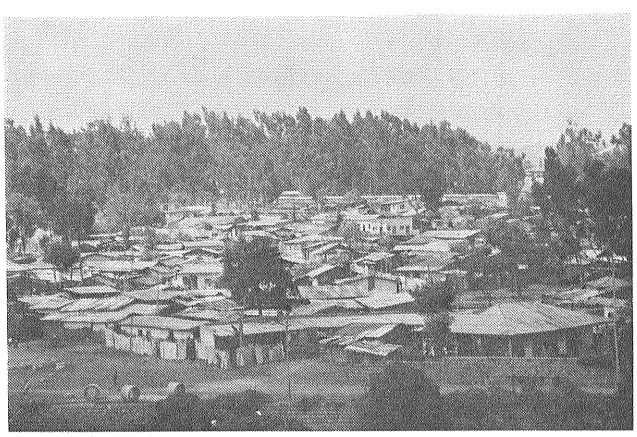


写真 1　ヒルトン・ホテルの裏手　一般市民の住宅

アジスアベバは　首都としては　まだ100年にも満たない新しい街である．　近代的な公共施設が立ち並ぶ反面　直ぐ裏通りにはトタン屋根の平屋住宅が集まっている．　前方のユーカリ林もアジスアベバを代表する風景のひとつ．

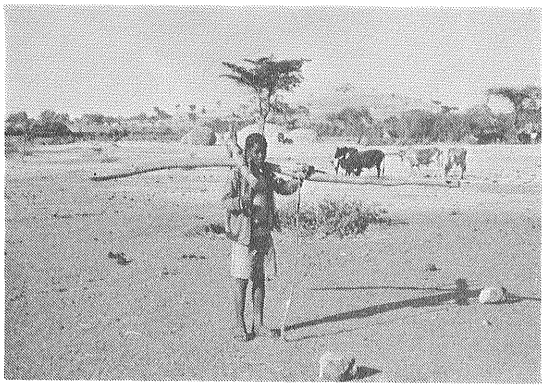


写真 2　棒を担ぎ　住居の移動を手伝う牧童
リフトバレーにいたる斜面地帯の農村風景．　主食の原料になるテフ（けしの実のような小粒の穀類）の収穫が終わって　畠には全く緑がなかった．　後で聞いた話によると少年の担いでいる棒は　住居（草ぶきの小屋）を建てるための大事な支柱とのこと．

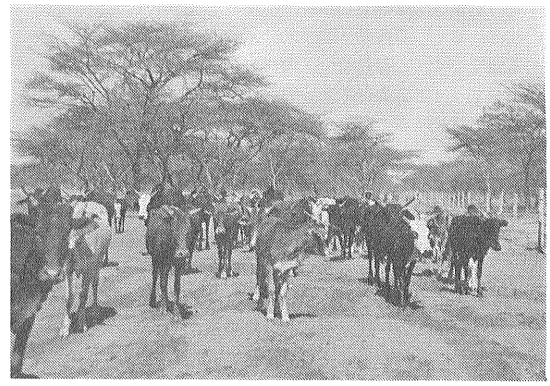
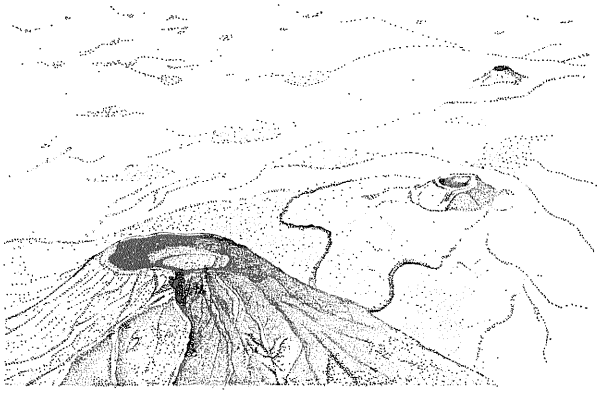


写真 3　車の通行をはばむ牛の群れ
エチオピアは牧畜の盛んな国で　放〜遊牧されている牛の数は人口（約 3,400 万）よりも多いという．　街を出れば　必らず 2　3 回　写真のような場面に見舞われる．背景は　これもリフトバレー地帯で非常に多いテーブル・ツリー（acacia tortilis）の叢林．

写真 5　湖畔からのリフトバレー眺望
バレーには　火山とともに数多く湖が分布している．これらの湖はリフトバレーが形成された後の　氷河期に生じたものという．　この写真では分からないが　ミルクコーヒー色の塩湖で　フラミンゴやペリカンが棲む．断層崖の向方（北）はアビシニア高原である．



おわりに　1 枚のスケッチを載せる．　これは　タンザニアに向かう飛行機からの眺めで　リフトバレーの全貌を最もよく捉えることができた．　近くの山は　火口に水をたたえ　遠くの小山（砕屑丘？）は平地に造られた墳墓のように見えた．　（斎藤）